

小林: 兵庫県立美術館の小林公と申します。本日は西野康造さんに、みな様を代表してお話を伺うという立場でお役目を頂戴しました。西野さんよろしくお願ひ致します。

西野: 彫刻家の西野康造です。こちらこそよろしくお願ひ致します。

小林: それでは早速ですけれども、一時間ほどかけて西野さんにお話を伺っていただけると幸いです。こちらのギャラリーでの西野さんの展示をみなさんご覧になられたかと思うのですが、現在に至るまでのお話を、順を追って伺えたらと思います。今日お話をするにあたって、どういうふうに進めていったらいいかと私なりに考えまして…。まずは西野さんの作品を拝見した時の自身の感覚と伺いますか、どういうふうに分が見ているのかということと素直に考えてみたんですね。その時に、私なりに言葉になった西野さんの作品を見ることの体験というか、西野さんの作品を見ている時は何か確固たるものの形を見るのとは大分違うなあと、とても感覚的な言い方になりますが、思いました。西野さんのこれまでのご発表の資料やカタログなどを拝見すると、西野さんが空を見ることについて時々語っていらっしゃって、どこかそうした感覚とつながっているのかなと思いました。そして、いま前のスライドで投影されているのは西野さんが旅先でお撮りになった写真だと思うのですが【写真1】、みなさんも既にご存知かもしれませんが、西野さんが日本で彫刻に取り組まれている時に、ある瞬間手が止まって、一旦彫刻を作ることができなくなると、旅に出られたというエピソードがあると拝見して、その辺りのことからお話を伺っていただけると思っています。そして、それが空を見る体験につながっていくとも伺いました。

西野: はい。今お話がありましたように、彫刻が作れなくなった時、それはちょうど学生時代の、今でいう大学院の時だったんですね。ものを作る理由がわからなくなって、それで買っていた樺の木を彫れなくなったんですね。かわいそうで。だめだなあっていうか。4年生までなんとか仕事はしていたけれど、大学院に行ったらはできなくなりまして。それから彫れなくなってしまって、ごまかしながら卒業してしまったんですね。それは未だに夢に見るんです。その時点でもうこれはだめだなと思って。憧れて入った美大、誇りというようなものを捨てようと、昔から海外に憧れていたので、アルバイトしながらお金を貯めて旅に出たんです。今日は作品の写真を見ていただくじゃなくて、あまりみなさんに見ていただく機会のない旅先の、今につながる経験をした写真をサササッと見ていただこうと思います。ヨーロッパだとかロシアだとか、そういうところはみなさんも行っておられると思うんですけども、やっぱり印象に残っているのは中近東、アジアなんですね。

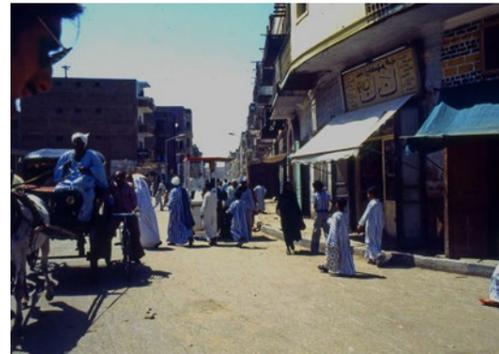
このピラミッドの絵から始めます【2】。中近東の入り口みたいな感じで見ていただいたらいいかと。もう40年、50年以上も前、この頃はピラミッドに登れたんですね。どこの遺跡も本当に人がいなくて、自由気ままに旅ができた、そういう時代でした。世界遺産というものもなかったもので、辺鄙なところに行けば行くほど、面白い経験というか辛い経験ができた。次も大した写真じゃなくて、この時代の風俗と伺いますか、ルクソールというところの町並み【3】。これはルクソールの王家の谷で、ツタンカーメンとか、そんなところも平気で入れて、フラッシュをたいて写真を撮ってたんですね【4】。これはツタンカーメンだと思うんですけど、もうよく覚えてません(笑)。まあ自由にしてたのと。



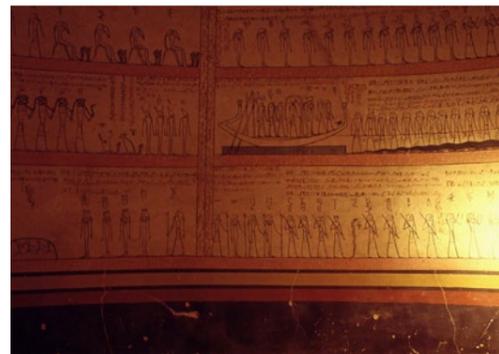
[1] 西野康造展 トーク会場風景



[2] ピラミッド (エジプト)



[3] ルクソールの町並み (エジプト)



[4] 「王家の谷」に残るツタンカーメン王の墓の内部 (エジプト)

西野: これはアスワン・ハイ・ダム【5】。パリにあるオペラスク、あれはエジプトから取ってきたもので、それを切り出してきた風景です。美術から足をあらって、ただの旅だったんですけど、彫刻家だったのでどうも石の切り出しとかいうところは気になりまして。溝を掘って行って、最後抜き出すという現場が残ったままになってたんです、その写真ですね。結構大きなもので、なんらかの理由でやめて終わってしまったという。これは、全然作品と関係ないんですけど【6】。

小林: お若い姿が。

西野: トルコの山の中で、ロバを買って旅をしようと。

小林: ロバに乗って旅をしようと?

西野: それがすごく今いい教訓になっているんです。ロバに乗って旅をしたいという日本人と。ああ面白いなと思って、僕は主体性を持たずに、金魚の尻尾のような形で、その友達と二人でロバを二頭買って、鞍を作って。

小林: 自作ですか?

西野: あー、いや、それは鞍屋さんに行つて。

小林: オーダーメイドですか。

西野: そのロバを売ってくれた村人たちは、トルコの山の中の方の人たちなんです。何が起きたかと言いますと、ロバを二頭買って、鞍をつけて、さあ今から旅に出ようと。それで一時間ほど引張っていったんですね。そしたらそこからロバが動かなくなった。全然動かないんです。そこまでがロバのテリトリーだったんですね。「お前らとは行かない」と。友達はロバとの旅を続けたかったんですけど、とにかくいうことを聞かないし、僕は自分の意志でロバを買おうと思ったんじゃないから意志が弱かったんですね。なので、ロバがかわいそうやし、もう返そうと。それで、結局返しにいったんです。そうしたらみんな集まって、そらそうやろ、と。

小林: わかってたんですね。

西野: そう、わかってたんですよ。お金も返してくださって。長老たちがモスクという小さな集会所に集まって、喧々諤々相談して、「こいつら今日泊まるとこないから、泊めるべきかどうか」と会議があつて、「泊めてやろう」ということになったんですね。次の日の朝、ある方が食事を持ってきてくれて、それはフライドエッグ(油で揚げた卵焼)とパンとヨーグルト。友達と「おう、助かったな」とか言ってたんですね。そうすると食べ終わった頃にまたほかの方が朝食を持ってきてくれて、「ちょっとおなか一杯やなあ」とか言いながらまた頂いて。終わった頃にまた違う人がきて。だから、一旦客人と決めたからには、みんながそれぞれ相談もせずに朝食を持ってきてくれてたんです。すごく感謝して、目覚まし時計をお土産にあげて。その後朝起きるのに苦労した。

小林: 渡してしまったからですね。

西野: はい。その時の村人たちが英語をしゃべれる人は一人もいませんでした。ドイツ語をしゃべる人が一人だけで、どうでもいい話を一杯しましたね。

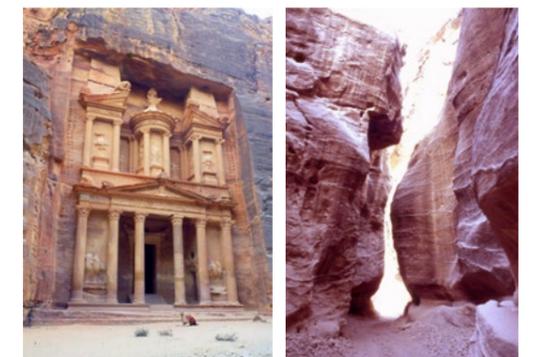
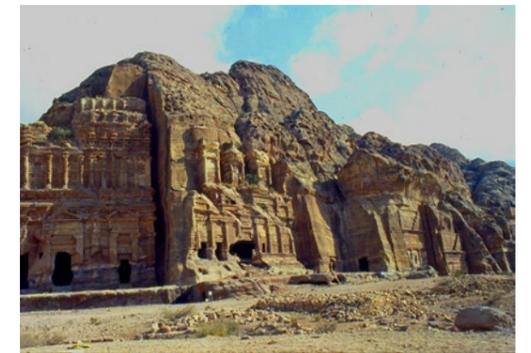
その次は、有名なヨルダンのペトラです【7】。観光客が一人もいないんですね。本当になくて。有名な遺跡なんですけど。ペトラへ行くまでには、トルコからシリアを通してヒッチハイクして、それでヨルダンに入るんですけど、シリアのダマスカスで若者が一緒に写真を撮ろうと言って、撮ってくれたんですね【8】。シリアは今大変なことになっているので、多分彼は爺さんになって苦労してるだろうと…。この後、ヨルダンへ行ってまた帰ってくる。



[5] アスワン・ハイ・ダム (エジプト)



[6] トルコの山中の村 (トルコ)



[7] ペトラ遺跡 (ヨルダン)



[8] ダマスカス (シリア)

西野：これは、小林さんがおっしゃっていた話につながるパルミラの遺跡です [9]。僕が一番、なんというか、好きだったというか。ローマ時代の遺跡というのは、僕はあまり好きでなくて、もっともっと古い、謎に包まれた遺跡が好きなんです。この遺跡で、空に対する思いがちょっと芽生えたっていうか。それが彫刻につながるのか、そういうことは全然関係なく旅していたんですが。写真の通り遺跡ばかりがあります。多分今はもう爆破されていないものが多いと思いますけども。あそこにアラブの砦というのがあって。

小林：丘の上のところですね。

西野：はい。これは遺跡の中ですね [10]。観光客もいなくて。てくてくと行って、ひまわりの種を食べながらずうっと時間を過ごして。こうして遺跡を上から見てたんですね。その時になんというんですかね、宇宙だとか、時間の観念だとか、まあ悠久なんだな、みたいな感じで。写真のそこは砦に行くまでの過程です。ほんとに誰もいなくて。これがだいたい登ったところ [11]、多分ここの上に橋があったと思うんです。高い位置に行ったところですね。これが、登り切ってそのパルミラの遺跡を上から写したところ [12]。ここでぼうっと時間を過ごして。ちょうど写真中央あたりに遺跡があるんですね。

小林：列柱がちよこちよこって見えてるんですね。

西野：そう。そうですね。これはちょっと降りてきたところ [13]。

小林：今の写真の男性は？

西野：僕です。27歳ぐらいですね。夕方になると羊飼いがこの遺跡を歩いて自分の家に帰る [14]。あそこにロバがいますけども、本当はあんな風にしたかったんですけどね。ままなりません。先ほどのパルミラの遺跡で、なんというかほんとに時間だとか空に対する憧れといたらおかしいですけども、思いが、今となって考えると焼き付いていたかなと思います。



[9] パルミラ遺跡と山上に残るアラブ城砦 (シリア)



[10] パルミラ遺跡内部



[11] アラブ城砦付近からパルミラ遺跡を見る



[12] アラブ城砦から広大な空と列柱の残るパルミラ遺跡を見る

西野：これはパーミヤンで [15]、これももう爆破されてないと思うんですけども。アフガニスタンのパーミヤンのそばの、寝泊まりできるようなところ。

今度は、パキスタンのモヘンジョダロ [16]。もうこの頃も、塩害で大変でした。レンガが海水を吸い上げて、それで白濁し壊れていく。今どうなっているか。調べていないのでわかりませんが。これがモヘンジョダロの遺跡ですね。

小林：白くなっているのが、塩なんですか？

西野：そうですね、塩害です。モヘンジョダロとか古い遺跡というのは、ほんとにわからない部分がたくさんあって、そういうのが魅力なんです。パルミラの遺跡はローマ時代の遺跡で、円形劇場があったり列柱があったり、遺跡自身にはそんなに魅力がないんですけども、砂漠にあるその位置に魅力を感じたんだと思うんです。この写真は、その頃のモヘンジョダロあたりの人の風俗で、裸足だったんですね。これはインドだと思う。旅に関しては、こういうことで。

小林：はい、ありがとうございます。西野さんが彫刻に返るきっかけになった、パルミラの空を見た、ということで、写真を拝見して少しヒントをいただいたような気がします。どんな空だったのかな、という想像をしていたんですけども、やっぱりスケール感がちょっと想像と違ってましたね。ほんとに何もいなくて。

西野：何もないんですね、砂漠。多分あのグリーンの所だけオアシスだったんです、ナツメヤシとかが生えていたんだと思う。

小林：なるほど。ほんとにその空というか、空と砂漠、大地というのも大仰なぐらいそっけない。美しいんですけどね。砂漠と緑と人工物の余韻といいますか。その取り合わせがとてもシンプルにこう、並び置かれているような景色。ちょっと、びっくりしましたね。

西野：そうですね。

小林：はい。それこそ、ほんとに全体を眺めておられていた、ということなんですかね。

西野：そうですね。

小林：どうしても空というイメージばかりを頭に思い浮かべてしまうんですけど、その風景の中に、やっぱりパルミラの遺跡はモヘンジョダロと比べると、この列柱のすっとした造形というか、かすかに立ち上がって列をなしている景色が私には印象的だったので。その微かな、気配みたいなものですかね。その人の為す、人為のね、とてもか細いだけでも美しいように感じましたので、ひょっとしたら西野さんの見たものに近い何かを自分も見ているのかな、なんてこの写真を見て感じました。対してモヘンジョダロはわりと平面的な景色というんですかね。レンガが面で見えてくる遺跡だなど。そのあたりは同じ古代の遺跡でもだいぶ違うんだなと。

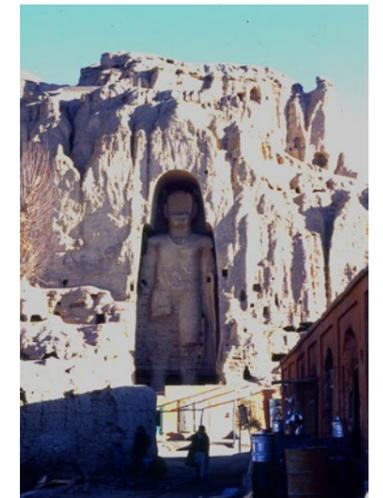
西野：そうですね。その過ぎ去った時間だとか、そこに昔は人がいたんだな、というそんなことも感じながら、ここで時間をずうっと感じていたのかもしれないですね。空を見ながら、過去の時間と、どんな人が住んでいたんだろうとか、どういう生活をしていたんだろうとか。おそらく宇宙も感じていたであろうし、時間も感じていた。そんな気がしますね。



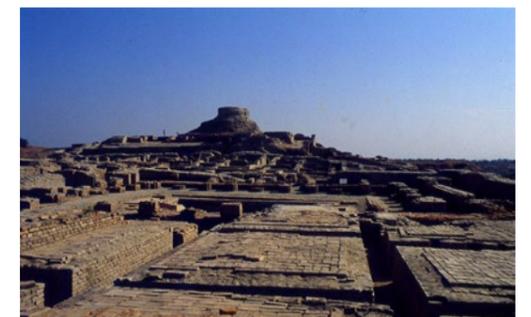
[13] パルミラ遺跡を訪れる西野



[14] パルミラ遺跡を通り帰路につく羊たち



[15] パーミヤン渓谷の石仏 (アフガニスタン)



[16] モヘンジョダロ (パキスタン)

小林： お話がだいぶ戻っちゃうんですけども。その旅のきっかけとなった、かわいそうになったという響に対して、それで完成してる、みたいなことですか？

西野： 何の意志もないやつに彫られるのがかわいそうだなあと。本当に彫刻が作りたくて木を彫っていくんだったらいいんですけども、何がしたいかわからないのにただ傷つけていくという。その時はもう迷いが一杯あったので、そういう意味で意思のないやつが彫ったらだめだよ、というふうに思ったんだと思うんです、自分で。木がかわいそうというのは、そんな意味です。

小林： なるほど、ありがとうございます。それで旅に出られて、こういった景色を見て、彫刻がやりたくなった。

西野： そうですね。旅に出て一年ぐらいしてからですね。

小林： 旅先でということですか。

西野： はい、旅先で。ネパールに行ったあたりで。

小林： その時間の流れの中で、やっぱりお写真を拝見していて、人が作ったものが、時間の中で少し押し流されていくというか。

西野： そうですね。出ていくんですよ。

小林： そういう景色だと思うんですけども、それを見て作りたくなるという。その作ったものが残るか残らないか、みたいなことというのは、この当時はわかりませんが、たとえば今の時点の感覚として、何かお気持ちがあるのか、どうなのかなと。実はこのことを遺跡の話とからめて今日何えたらと思って来ていたんです。

西野： ああ。

小林： その時間の流れの中で、それこそすべては残らないけれども、なにか遺跡というのは残っている。

西野： そうですね。

小林： 場所ですよ。その大きな時間、世界を前にして作りたくなるというのは。言葉にしてもしょうがないというか、今実際に西野さんが作品を作られている事が、一番の答えであろうかと思うので、こういう風に聞くのも野暮かなあと思いつても…。わりと自然に作りたいたいと思えたということですよ。

西野： どうなんですかねえ。やっぱりあきらめたとはいえ、どこかにちょっと種が残っていたんでしょうね、きつとね。本当に白紙に戻して、芸大を出たことの自信やいくつか自分の中で誇りのような形で残っていたものをかなぐり捨てた。彫刻科を専攻して、でも何の展望もなく彫刻をしてたんです。なので自分の中で確固としたものがないので、卒業してから彫刻家になるかという、そういう気持ちもなかった。卒業する頃には意思がなかった。とにかく世界を見てやろう、世界中を回ろうというつもりで。まだアメリカ大陸にも行くつもりだったんです。でもネパールに来たあたりで、パルミラの遺跡を見たからとか、モヘンジョダロを見たからなのか、あるいはやめようと思ってから働いたりして時間がもう何年も経っていました。ちっちゃく残っていた思いみたいなものが、自分中ではないだろうと思っていたものが

ちょっとずつ膨らんできた、といいますかね。それで、ああそんなや、というか、自分の中にあるんやなあ、って思っ。そうや、残っているお金を持って帰ろう、というふうに思いました。それから、日本に帰ってトラックを買って。

小林： ロバの代わりに。

西野： はい、トラックを買って、一気にアトリエを建ててしまいましたね。それが彫刻家のスタート。答えとしては、やっぱり物を作りたかったんや、彫刻家になりたかったんやなど。なにが理由でそうなったのかはわかりませんが、徐々に芽生えていったのかもしれないですね。

小林： ありがとうございます。今回の展覧会では楽器のモチーフの作品がありますが、彫刻家としての最初期の作品は、楽器のモチーフの作品ということではないんですよね。

西野： はい。

小林： その手前の作品は、どういった作品なんですか。

西野： 旅から帰ってきてトラックを買った頃には、もう一生やめないなという意思は固まっていた。ところが、個展をするとかいうのは、僕にとってはすごく大きく重たいものだったので。今の若い方が、若い時に個展をするような感じじゃなかったんですね、その頃って。もっともって重たいものだと思っていた。それで、その頃はコンクールがたくさんありまして、とりあえず挑戦していこうと。でも3年間ぐらいですかね、鳴かず飛ばずというのか、20連敗してね。

小林： 20連敗。

西野： 20連敗しました。でも審査員が悪いんやと思って。

小林： 励みになるお話ですね、若い人に。

西野： 今から考えると大した作品ができてないのに、その頃は本当に自分ではいいものだというふうに思っ。見る目がないやつが多いなあと思っ。ほんとはいい作品を作っているんです。ただ、いろんなことを、何かあかんのかを一杯考えたので、今となってはそれがまた種になっているんですね。なので、今に続くようなものとか、その頃むやみに考えてやたらと作っていたものが基礎になっている。合格点に達していない稚拙なものだったんですけど。そんな感じでしたかね。

小林： そうすると、ようやく合格点あげてもいいかなあ、という。

西野： それで入選し出したのが、今回の出展作品とは違うんですが、近いものだったんです。ところが、美術教師をしていた家内と僕のところに子供が3年間で4人できてしまったので。

小林： 奥さん大変でしたね。

西野： おおきに。僕も大変だったんですけどね。ハウスハズバンドっていうか。イクメンの始まりのような。近所の人にはずっと白い目で見られ続ける。

小林： 今はね、知られてきましたがね。

西野： そうですね。ただ、山間部で産休教師が誰もいってくれなかったので、校長が「お前の責任だから、お前が教えに来い」と。それで、僕が行くようになったんです。なので、入選し出したようなものに近い作品ができなくなってしまったんです。

小林： その教職が忙しかったから？

西野： はい。それで田舎の学校の先生になるんです。3学年で15人しかいない中学校で、授業をしない時間がほとんどだったので、「先生は教えに行くけど、空いている時間は自分の彫刻作るよ」と、ずっと美術室で作っていたんです。そんな大きな教室ではなく、体育館に置いていたブラスバンドの楽器を、この際これを作ってみよう、楽器を（作り）始めたんです。ただ、自分がこれからしたいなと思っ。スタイルではなかったので、何年かでやめてしまいました。

小林： 置かれた状況の中で、制作環境、物理的なスペースやモチーフが、そういう条件の中での作品だったということですね。

西野： そうですね。

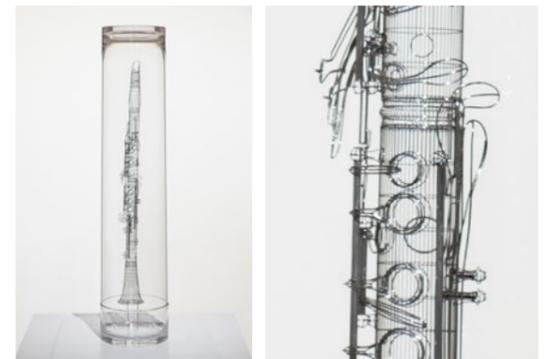
小林： とはいえ、今回の作品では、タイトルが少し変わったものだなと。《Capsule from 2053》で、未来からのカプセルという【17】。

西野： ああ、そうですね。

小林： 今風というと、ワイヤーフレーム、文字通りワイヤーですけども、コンピュータグラフィックスなどで言うようなワイヤーフレーム、少し若い世代の僕から見るとそういう言い方もしてしまうような作品です。実際に作品を見ると、なにかそこにあるんだけどないというような、見え方というかあり方をしていますよね。それが今回の展示のタイトルでは、よりはっきりと、そうしたものとして西野さんが提示されているなというのがすごく伝わってきて。やっぱりそういう見え方をする作品として作られていたんだな、と思っ。何かそのものとして現れるということとは違うものを作っておられる。まさに「気配」という言い方をここではしたいと思うんですけども。今回、「未来からの」と、どうしてそういうタイトルになったのかということをも、もう少し何えたらと思っ。んですけども。

西野： んー、そうなんですよ。今回はほんとに、空間はすごく意識してるんですけども。それとやっぱり時間というのも意識の中にあるんです。

小林： 《宙に架かる2020》のそばにある作品二点が《Walking in the sky》です。先ほど作品を前にしながらお話を伺っていて、なるほどなあというふうに思っ。二つの作品があっ。それぞれが別の作品なんだけれども、自由に関係を持っていて、とても大きな世界に包まれているというふうな気持ちにさせてくれる作品だということ、感覚的に、私は作品を見るものとして受け取っ。それが西野さんの思い描いていた、何というか取り合わせといますか、によっても生まれていたんだなということも教えてもらっ。とてもうれしくなっ。このタイトル、特に大きな輪の方の《宙に架かる2020》という作品を。ちょうど今こちらの写真の角度から、見る時のおすすめポイントだというふうに伺っ【18】。皆さんもご覧になりましたかね、こちらから。ここで「空」、先ほどのパルミラ。丘から行けば水平方向に空を見ることもできるでしょうし、場合によっては空を見上げるということを我々普段しますけれども。この作品では、ここに立つと空を見降ろすこともできると。



【17】 《Capsule from 2053》1987-2020年
ステンレス、ポリカーボネイト | 90 x φ 13 cm 撮影：表恒匡



【18】 《宙に架かる2020》2020年 | チタン合金 | φ 7.2 m 撮影：表恒匡



[19] 《Walking in the sky》2000-20年 | チタン合金、鉄 | 8m、10m 撮影：表恒匡

西野： 神さんになっていただくというか。宇宙飛行士が宇宙に出ると、ほんとに神の存在というものに気が付く、その存在の大きさとか、僕自身は宇宙自身が神だと思っているんですけども。自分が神として地上を見下ろすというような、そのスポットがここなんです。向こうの鉄の塊がエベレストだとかの山で、向こうの二点はそこにたなびいている雲なんですけれども。今さっき小林さんがおっしゃっていたように、僕自身があまのじゃくなので、見てほしい、けど見てほしくないだとか。

小林： 秘密をばらしてしまいましたね。

西野： そういう思いが強いです。だけど、やっぱり見てほしいみたいな。そういう彫刻を作っているというか。それと、周りの空間をすごく意識してるんだと思うんですね。だから、この作ったものが何を表しているかではなくて、その空間をどう表現して、その空間をどう表すかとかいうか、生かしているかという、そういう表現をしたいなというも思ってるんです。このスポットから見るとほんとに神さんになったような気持ちで、宇宙から地球だとか銀河を見ているというような。

小林： 私たちもここに立つとその神様になるわけですけども。こう、空を見下ろしながら、たなびく雲ができる「場」というんですかね。最初にお話した私なりの西野さんの作品から受ける印象と、やはりそれほど遠くないかなと思うのは、この作品だけを見ているわけじゃなくて…。もうちょっと大きな、この作品がある事によって見えてくるまわりの「場」。

西野： そうですね。

小林： 空間という造形的な言葉よりも、もっとこう広くて、柔らかい…。

西野： ありがとうございます。

小林： 「場」というのがいいのかなというふうに思うんです。この場所から見ると、空に架かる作品の反対側の先の、この遠さがなんとも心地よくて、不思議なんですけども。この「遠い」というところも遺跡の話とつながるかもしれませんね。過去というのは、とても遠くて手が届かないはずなんですけどもそこにあって、少なくとも眺めることができるという、その不思議な感覚。僕もしゃべりながら考えているのでまとまらないんですけども。ただ、西野さんの作品からは「遠さ」も感じるというのはあると思うんですね。例えば、

もう一つの《Walking in the sky》[19] という作品も、どこの視点から見てもきつとその作品が、こう目を導いてくれる先、といいますか、仮に「遠さ」という言い方をする感覚を与えてくれるのだけでも、この「遠さ」というのは拒絶されるということではなくて、むしろ自分をそちらに引っ張ってくれるような、そういうものとして、作品が生み出してくれる空間は、そういうふうに見る私に作用しているかなと思ったりもしました。「気配」という言い方が近いのかもしれない。

西野： そうですね。ほんとに五感で、あるいは六感、まあ五感で感じることを、経験とわずかな知識で物を作り上げているんです。五感で作っていることというのは、わりと伝わりやすいんですね。ただ、この中に何があるかということになると別なんですけども。先ほどから、パルミラだとかそういう絵を見てもらいましたが、自分の中では、薄い薄いフィルムに、ほんとにわずかに薄く、一枚見てもわからないようなその風景とか、自分が感じたもの見たものをずっと繰り返して重ねていっていると。だんだんと影になり、ものになってくる、形が見えてくるという。どうもそんなふうな感じで自分がものを作り上げてきたような気がするんですね。僕はあまり活字が好きじゃなくて、ただ景色を見るのが本当に好きで。新幹線で東京に行ったり、飛行機に乗ったりしても、ずっと外を見ているんですね。何をj見てるといことはないんですけども。それがずっと薄く薄く、焼き付いたものがたくさんあって。おそらくパルミラだとか、空だとか自然の風景だとか、そういうものをずっと見ているうちに、何かこういう作品につながっていった。でも、いつも幼児の感覚で生きているなあとこの気はするんです。全然答えにも何にもなっていないんですけどもね。

小林： 幼児の感覚って、結局何も知らずに世界に生まれてきた、投げ出された時の感覚みたいなことかな、と。もう一つ、先ほど作品を前にしてお話をしながらちょっとお尋ねしかかっていたことなんですけれども、今回の「宙」とタイトルが付いている《宙に架かる(2020)》、と《Walking in the sky》の2点。片方が円環の形をしていて、もう一方がすうっとこう先に伸びたような形をしていて、そのどちらも西野さんの代表的な造形スタイルというか、形だとは思いますが。輪というのは形としては強い、それに対して、すうとこう

伸びる形というのは、何かイメージとして手がける時の感覚が違うのかな、ということ少し伺えたらなと思ったんですけども。

西野： ビデオをお見せします [20]。プクプクとなっている、これは物理の現象なんですよ。物体は球になろうという力が強くて。それで最終的にこうして地球だとか太陽とだか宇宙ができていくんですけども。これは僕が特撮したもので、コーヒーカップに油を垂らして浮かべたら、すごく楽しくて。

小林： 眺めるためにですね。

西野： ああ、これ面白いなと。こういう話の展開になると思っていなかったんですけども、「輪っか」とおっしゃたので。僕の中ではやっぱり、輪というのは宇宙なんですよ。輪でないものもたくさんありますが、自然の現象といいますか。あれ、ピクパン。こういうカップの中の世界です。朝、コーヒーの上に油垂らして、そこにまたスプーンでコーヒーをいれてやるといろんな世界ができた。

小林： じゃあ、これミルクコーヒー？

西野： ミルクコーヒーなんです。ミルクをたくさん入れて。ではもう一つ、嵐のようなビデオを [21]。これも、もうほんとに自然に工場の上から加工せずに撮っていたんです。台風、稲がまだ小さかった時にですかね。風が見えるといいますかね。それで、この稲の葉っぱがこっちの作品で。そんな感じですかね。

小林： そのままということじゃないんですけども、こう流れているというか、動いているという。

西野： これ、今日の答えのために準備していたビデオじゃなくて。なんか楽しそうやからって撮っていたんです。

小林： なにか、お気に入りの？

西野： ちょこちょこ、散歩したりした時に、ちょっと気が付くと。

小林： 撮られたりするんですか？

西野： はい。別にそれをまさかここで見せするとは思ってなかったんですけど。

小林： えっ、そうなんですか。このトークのために、つてことでは？

西野： じゃなくて。

小林： あ、違うんですか。

西野： はい。

小林： でもすごくなか…

西野： お答えとして…

小林： いや、すごくなるほど!と思いました。もし他にもありましたら。

西野： あります。

小林： もうあと2つぐらい、映像がありそうに見えたので。

西野： もう一つはね、これは小川が、右から流れてるんです [22]。

小林： 右から、左に流れてる。

西野： はい。川は右から左に流れてるんですけど、風で、太陽の光が右に流れているように見えて、すごくキレイだったのと、波紋が本当にいろんな波紋をするので。こういうものを幾つも撮って、楽しんでる。色も自分の作品に近いといいますかね。

小林： そうですね。

西野：ほんとに子どもたちが喜びそうな感覚で、そんなに深くは考えなくて。自分がやりたいことを、こうやらしてやろう、というふうな感じでものを作ってるんです。

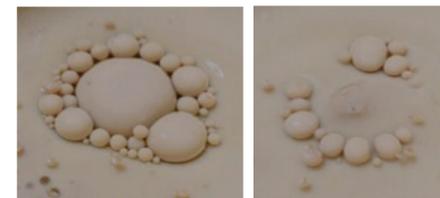
小林： 自分に、自分で自分を許してあげる、というようなものですね。

西野： 作品を買ってくれる人がある、買ってもらえる時が来るなんて夢にも思っていなかったんですよ。でも、もう一生やり続けるって決めたので。まあ好きでやってることなんで、という感じで。こういう世界、といいますかね。楽しみながら、これも薄いフィルムの一つだと思っんですけどね。こういう積み重ねみたいな感じで、こういうものができていったのかな、と。

小林： すごく、ありがとうございます。

西野： んー。まともなお答えができてなくて申し訳ないです。

小林： いえ。とんでもないです。やっぱり、直接この映像が、先ほどの映像がということではないんですけども、私を含めてそれぞれの人が、やっぱりそれまでに生きてきた時間の中で、ちょっと覚えてなくても見ていて美しかったなあという、意識されない記憶といったものがみなさんそれぞれにあると思うんですよね。それがきつと西野さんの作品を前にして、無意識的にきつと思いつているから。言葉に



[20] 参考映像：コーヒーカップの中の宇宙とピクパン



[21] 参考映像：稲田を駆け巡る嵐の風



[22] 参考映像：小川の流れと光

すると、金属でできていて、シャープな造形という言い方もできるけれども、実際の作品を前にして、なんていうのかな、角ばった印象というのはあまり抱かないですね。柔らかくて、柔らかいというのもちょっとなんていうのかな、モタツとしすぎてから、もうちょっとスッキリしたものとして見ていると思うんですけども。でも、角が立っていないという印象を受けながら、同時に、無駄のない造形として感じられるということは、おそらく作品を見る人と西野さんとがそれぞれに何かを見てきた体験が作品によって出会っているというか、結び付くことがあるから、なのかな。というふうに、映像だけでなく、西野さんのお話を伺いながら思いました。

いろいろとおねだりしているうちに、だいぶ時間が経ってしまったようで。

西野： まともに、ねえ、お答えできなくて。

小林： いや、最後の映像とパルミラの要素が大事なところになっているというのを、実際にものを前にして伺えたのは良い体験だったと思います。どうも、ありがとうございました。

西野： どうも、小林さん、ありがとうございました。もし数分でも、会場からも何かご質問でもあれば。

質問A：彫刻を一番初めに始めようとなさったときは、木彫？

西野： いえ、木彫は…僕、正直言って石彫も木彫も嫌いで、まあ好き嫌いの問題で…。石や木を彫る人がそこに魂を見つけ出すとか彫り出すとか、僕はそういう作家ではなくて。それがいいとか悪いとかじゃなく、僕は継ぎ足してどんどん大きくなるというのが好きだった。ただ、一応全てやっておくということが自分の中であったので、木も持っていたんですけど、それもあって余計に彫れなかった。

質問A：でも、旅から帰られてもう一度やろうと思われた時は、すでにもう今のような形の作品から？

西野： いえ。石も彫っていました。石を彫ったり大理石を彫ったり、木はあまりやってないと思うんですけども、いろんなことをやった。何でも屋さんで、ユンボも、パワーショベルも持っていますし、クレーンも持っていますし、大概のことはできると思います。

小林： すごい。アトリエも建てられましたしね。

西野： そうですね、アトリエも継ぎ足しのできることだったかな。とにかく今は、繊細でダイナミックなことがしたい。その周りの空気を皆さんに感じていただきたい。そういう作品だと思っていただけたらいいなと思います。繊細でダイナミックというのは、ちょっと相反するようなところがあるんですけども、それが僕の中の身体の中にずっとある大切なものだというふうに思っています。

質問A：今のおっしゃる通りの作品だと思います。

西野： あ、そうでしょ。

質問A：ただの雰囲気ではなく、全てが素晴らしい。

西野： ありがとうございます。

質問B：この続きの映像がほかにもあったら、見せてほしいです。

西野： 写真が一、二枚ほど。歩いていて見つけた写真 [23]。これも宇宙なんですよ、僕の中で。

小林： 海岸ですか？

西野： これは田んぼで籾殻を焼いてあった跡の風景です。田舎なので稲刈りの後に、火を付けはるんですけど、その燃えかすというか灰が、宇宙がここにあるみたいな感じで。

小林： この白いものが灰ですか？

西野： 灰ですね。それで、これはクラゲの化石と僕は言っていて [24]。お茶碗を洗った後に置いておいたしずくのカルシュウム。

小林： あの、シンクの…。

西野： はい。シンクの上の化石。要はそういう世界。

小林： 化石ですか…。

西野： あとお風呂の鏡がくもると、きれいだなと思ったり。

小林： なるほど。ぜひみなさんもお家に帰って再確認していただいて。

西野： 洗い場の周りは隠してくださいね。周りを隠すと宇宙になっていく。まあ、それぐらいですかね。

小林： ありがとうございます。それでは、これで西野さんのお話を伺う会は終了したいと思います。どうも、今日は有難うございました。



[23] 籾殻の焼き跡が残る海岸の風景



[24] シンクの痕跡

▶ Outline

西野康造「空を歩く」 対談

2020年1月25日[土] 15:00-16:00

小林 公（兵庫県立美術館 学芸員）× 西野康造

会場：アートコートギャラリー

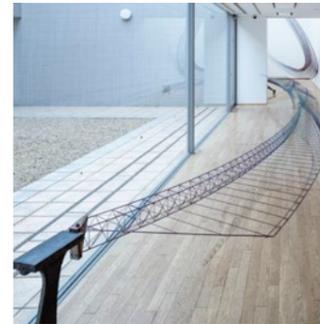
Kozo Nishino: *Walking in the Sky* Artist Talk

January 25 (Sat), 2020 3:00pm-4:00pm

Tadashi Kobayashi (Hyogo Prefectural Museum of Art) & Kozo Nishino

Venue: ARTCOURT Gallery

▶ Contents Online Viewing 【Kozo Nishino: Walking in the Sky】



01

西野康造「空を歩く」 展覧会記録

Kozo Nishino: *Walking in the Sky*



02

「空を歩く」 対談

小林公（兵庫県立美術館学芸員）× 西野康造

Artist Talk

Tadashi Kobayashi (Hyogo Prefectural Museum of Art)
& Kozo Nishino

Now Viewing



03

Latest & Available Works

[Online Viewing Website へ戻る >](#)

[Return to Online Viewing Website >](#)